



歩けよ

339

絵と文
小林由枝

阿弥陀さまよ
ご縁を結ぶ
真如堂



神楽岡通を歩いて訪れる真如堂は、私の大好きなお寺の一つです。

お寺の普段の佇まいとあり方に、なんとも心休まるのです。紅葉の声をきくとにわかに人が多くなり、静かなお寺。私好みの朱色の山門をくぐり、本堂前の菩提樹の木の優しさや、猫たちののんびり過ごす姿に癒やされます。参道には三重塔、正面にはどっしりとしたご本堂、重厚なのに優しさを感じるのは、ここのご本尊さまが女性を救済してこられた阿弥陀如来さまだからでしょうか……。

昔むかし、比叡山の慈覚大師円仁さんが、カヤの霊木で自ら彫られ

た如来像に「都へ下り一切衆生を導き給え。特に女人を救い給うや」と

問うと、像は三度うなずかれたといひます。その後、叡山の戒算上人が永観2年に一条天皇のお母さん、東三条院藤原詮子の神楽岡の女院離宮に一字の堂を建て、その阿弥陀如来像を安置したのが、真如堂の起りであるようです。阿弥陀さまが、うんうんとうなずかれるなんてお話とても身近に感じますよね。阿弥陀さまは、その後「うなずきの弥陀」と呼ばれて親しまれ、歴史上の女性の帰依も多かったようですね。



お十夜の

鉦の音

はこぼ
秋の風

お不動さんは、晴明さんが急死した時に閻魔さんに掛けあって、蘇生させたというお話が伝わっています。他にも、晴明さんが閻魔さんから授かった極楽への通行手形のような五芒星の印鑑が残っていたりと、とても極楽浄土に近いお寺なのですね。

またこの日は、お十夜粥も振る舞われます。お十夜粥は、



この優しい阿弥陀さまとご縁を結べる日があります。毎年、十一月五日から十五日、この期間には境内に回向柱が立てられ、ご本堂から柱に白い「縁(善)の綱」が張られています。これは阿弥陀さまの右手につながつており、綱を握り締めれば、阿弥陀さまのお手に触れたことになり、ご縁を結ぶことができるのです。

この期間を「お十夜」といい、室町時代に伊勢守平貞国が真如堂で三日三夜の念仏の行をしたところ大変利益を得られ感激し、阿弥陀さまのご恩に対する感謝のお勤めをあと七日

秋に収穫した穀物を阿弥陀さまにお供えし、そのお下がりでお粥を作って頂く習わしからで、中風除け、たれこ止めのご利益があると言われていいます。葉がいろづき始め、冷える境内で昆布がのった小豆粥を入れたお茶碗が手をほぐしてくれ、ふーふーしながら頂くと身体がほこほこ温まりますよ。

結願日の
お十夜粥



紅葉の季は本当に美しい真如堂、顔をのぞかず大文字山(如意ヶ嶽)も秋の装い。見上げては愛で、足元にて落葉の絨毯を愉しみ、そのさまは、まさに燃えているという表現がふさわしいのではないかしら。この色は果てる前の極みの色、夕日が沈む西方浄土の色、ここは極楽? 阿弥

あぢかんの
底は
阿弥陀
梵字
ありがたや



陀さまのおわす所、ご慈悲が差し伸べられている所。まさに「真正極楽寺」。お寺の正式名の示すままです。境内に響くお十夜の澄んだ鉦の音に、浄土に馳せる思いから引き戻される。そのまま秋風にのってお供をしてもらい、和やかに歩き出します。さて、いつも通り金戒光明寺の文殊塔にご挨拶して帰りましょうか、それとも宗忠神社を抜けて吉田山へもう少しお散歩しましょうか。秋はどんどん深まっています。

〈こぼやし ゆきえ〉
京都・下鴨生まれ。大学で日本画を学び、卒業後は本、雑誌、広告、新聞、TVCMなど幅広く絵に関わる仕事に携わる。著書に「京都でのんびり」私の好きな散歩みち、「京都をてくてく私が気ままに歩くみち」、「京都のいちねん わたしの春夏秋冬」がある。